

美術月評

2月

上村豊

文化

今日は県内の芸術教育に関わる高校、専門学校、大学などを卒業する学生が、その研究成果を世に問う「卒業・修了制作展」が各所で開催された。今回の月評は、こうしたいわゆる「卒展」の中から、新たな問題提起の動きを感じた二つの展示に絞って紹介したい。

沖縄県立芸術大学卒業、修了作品展（2月15〜19日）、県立博物館・美術館創立30周年を迎えた県立芸大は、昨年より「卒業・修了展」の会場を従来の当蔵キャンパスから県立博物館・美術館に移し、同館との共催事業として新たにスタートさせた。今後、県の



我如古真子（県立芸大）の作品展示風景



玉城彩乃（県立芸大）「記憶の最果てに」

芸術・文化を担うこの二つの拠点機関が、単なる展示会場の貸借関係を越えてより一層の協力・連携を深め、沖縄独自の「卒展」を創り出し、全国に発信していくことが期待される。2年目の今年も、「コレクショナル」な視点で、祖母や母の古着、残された古

古布を紙に漉き直す 風景へ相反する視線 観光地に漂う空虚さ

我如古真子

玉城彩乃

大嶺 かすみ

強力な隠蔽力に対抗 陶器に無限の奥行き

仲宗根みなみ

その「作品」をそれらしく馴染ませてくれる半面、それが生み出されたプロセスや背景の「生々しさ」のようなものを見えなくさせてしまふ面もあるように感じた。

そんな中、こうした美術館という場の持つ強力な隠蔽力に対抗するよう、唯一、高橋相馬（絵画）によるインスタレーション「青い小屋」が、文字通り美術館の内部と外部のはさまか

術館のほぼ全域を使い、絵画、彫刻、デザイン、そして陶・漆・織・染の工芸各分野を学んだ80人余りの学生による作品展示が行われた。ものを持ち運ぶための紐や袋、身体を包み保護する第一の表皮としての衣服。人が布を使ってもみ出してきたさまざまな形態からその機能を切り離し、身体と文化の本質に対する問い掛



大嶺かすみ（県立芸大）「グレインス ジャーニー」



高橋相馬（県立芸大）「青い小屋」

面から向き合う自覚的な取り組みとして、高く評価すべきものであると感じた。

琉球大学美術教育専修卒業、修了展（2月15〜19日）、琉球大学研究者交流施設・50周年記念館



仲宗根みなみ（琉球大）「つながるおさら」

は単に奇抜な作品として片付けられるものでなく、むしろ美術館という場に真正出た作品が印象に残った。他方、展示、鑑賞に特化した美術館の空間は、それ

「卒展」は、時代を先取りする新たな表現の潮流を生み出す場、そして学生たちは、建物内の研修室やラウンジ、ホワイエ、廊下を同時代の社会につなげていく「発信・交流の場」として重要である。実際に

ても近年、従来の公立美術館におけるお仕着せの一律展示にとどまらず、今日の展示テーマやコンセプトに応じた積極的かつ多様な展開が見られ、またアート関係者や地域社会も巻き込んで行うフレューチャーやシンポジウムといったイベントも盛んである。一種の「アートフェア（見本市）化」ともいえる傾向がある。

一方で、学生たちにとって「卒展」は、社会や制度との緊張関係の中で、初めて自らの表現の足元、すなわちその主体性や自律性を問われる場でもある。そして現在、さまざまな局面において「表現の自由」が危機にさらされるこの地で開催される「卒展」のような「表現の足場」を問い直す観点は、何よりも重要なものではないだろうか。

（琉球大学准教授）